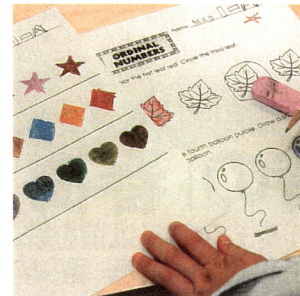


冒頭から身内の話で恐縮だが、我がアエラ編集部に現れた一人の中国人女性が、始まりだった。上海から研修でやってきた「中国青年報」記者の林蔚さん(29)。「初めまして。林と申します」

流暢な日本語であいつし、日本語で雑談を交わし、日本語で完談まで言う。もちろん日本人には日本語で取材し、メモも日本語で取る。漢字もひらがなも書く。

彼女は今年1月の来日まで日本に来たことはなく、留学経験もない。両親も中国人。日本語は北京の大学で4年間勉強しただけで、卒業後はしばらく使っていないから、今回の来日の前に、少し



復習した程度だという。にもかかわらず、その達者なところ。だが、それだけではない。彼女は、ふだんは当然中国語で考えているが、日本人と日本語で話しているときは、頭の中でも「日本語で考えていますよ」と事もなげに言う。

この一言が、みんなを驚愕させた。

えっ、日本語で考える？ それって一体どういうこと？。そもそも、頭の中で考えるという行為に、中国語と日本語が共存していたら、混乱するのではないのか。そんな人は、夢をみているときも、複数の言語で話しているのか。

つまり、例えば、英語で考えるところか話すこともままならない人にとっては、

この「複数の言語で思考する」という感覚というか、意味が理解できないのだ。多少英語ができる人でも、例えば米国人と話すとき、頭の中では、相手の話した英語を日本語に翻訳した上で、意味と適切な返事を日本語で考え、それを英語に翻訳して、口から出す、という作業をしている、のではないのか。



「日本語で考えて、英語で話していた」

と云う。しかし、林さんのように、幼児期からのバイリンガルや帰国子女

photo 高井正彦(左、18ページ中左も) 篠塚ようこ

バイリンガル脳

英語で考えることができませんか

できない人間からすると、脳の構造が違うとしか思えない。だとすれば、TOEICで高得点を目指しても、無駄な努力ということになる。で、そ、そんな……。実際どうなのか。

編集部 有吉由香

なれる人 なれない人

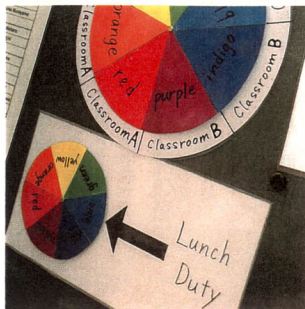
というわけではないのに、短期間で語学をマスターし、頭の中でその言語で考えて流暢に話す人が実は時々いる。そして、そういう人たちにとっては、複数の言語で考えられない人のほうが、理解できない、と言っている。

都内で英訳の仕事をしている女性(35)はスペイン語もできる。

「逆になりますよね」と、逆に不思議がる。彼女も、幼児期に特別なことはしていない。

英語の勉強を始めたのは中学校からだし、スペイン語は高校卒業後に1年間留学していた南米で覚えた。どちらも、ネイティブスピーカーのように流暢ではないが、会話に不自由はしない。

さらに、続けて、



バイリンガルの上を行く、3言語のトリリンガルだ。

「頭の中で考えたことを口に出すときに、相手に応じて英語になるかスペイン語になるかの違いだけが無意識に出てくるので、少なくとも日本語からの逐語訳はしていませんね。日本語から翻訳していたら時間もかかるし、不自然な表現

た感じになるので、脳の中の動きは同じなのかも知れませんね」

「Yo」なのか、といった感じになるのか、ということも理解できないし、一方は、複数の言語で自然に考えられない人が理解できない。これは、両者の間にいわゆる

英語で話しかけられたとき、英語で話すとき、脳はどんな働きをしているのだろうか(写真はイメージです)



「脳の壁」がある、ということになってしまっている。確かに、よく英語のヒアリングを勉強している、「ある日、すらすら意味がわかるようになった」といふ人がいる一方で、「いつまでたっても、さういう「ある日」が来ない」という人もいる。これが、努力の差ではなく「脳の差」となってしまえば、絶望しが残らない……。

「L」という言葉自体は広い意味を持つようで、成長してから母国語の後に第2言語を習得した人もいれば、両親の国籍が異なり、生ま

れたときからほぼ同時に2カ国語を習得していく人もいます。

カギは省エネ脳

関西学院大学の山本雅代教授(言語コミュニケーション)によると、「そもそも言語を獲得する幼児と学習する大人では違いが多々ある。仮説もいろいろある。研究者の間で何となく意図が取れているのは、発音については年齢が早いほうが習得に有利ということですが、同時に、脳と言語についての研究が近年、脳の局所的な血流の変化を画像として見られるMRI(磁



実際にどうなのか、ここから先は、やはり脳科学の手を借りねばならないだろう。もっとも、「バイリンガ

気共鳴画像装置)などの登場によってかなり進んだのも事実だ。

『言語の脳科学』の著書がある東京大学の酒井邦嘉助教の研究でも、言語に必要な脳の部分で「文章理解」「文法」「単語」「音韻」の4カ所に分かれていることが分かっている(18ページの図参照)。それぞれの部位は、日本語でも英語でも別の言語でも同じ部分を使っており、手話の場合でも同様という。

酒井さんの実験結果で特に興味深いのは「省エネ脳」だ。前頭葉の「文法中枢」について、英語が熟達するに少なからずエネルギーが消費されるという結果が出ている。実験はこうだ。中学生のグループと大学生のグループに、例えば、不規則動詞の正しい活用形を選ばせる。そのときの脳の変化を見たところ、

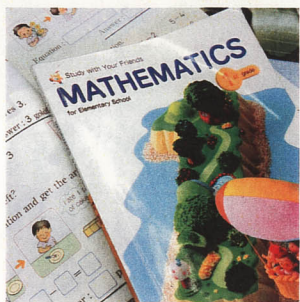
「英語学習を始めたばかりの中学生は回答する際に、成績の向上に比例して文法中枢の活動が活発になる。しかし英語に熟達した大学生では、正しく答えられているときでも、この文法中枢がそんなに活動していない」という結果が出た。しかもこの傾向は、成績の良い学生ほど顕著だったというのだ。

スポーツとも同じで

そして、この場合の「省エネ化」こそ、意識せずに英語が出てく

る状態」、つまり「英語で考えて英語で話す」段階に移行したと考えられるのだという。

これは、スポーツに似ているかも知れない。始めたばかりの時は力んで無駄な力が入っているのが慣れくると必要な筋肉だけを使って自然に動けるようになる。脳の指令も慣れくると、無意識に



25歳からでも

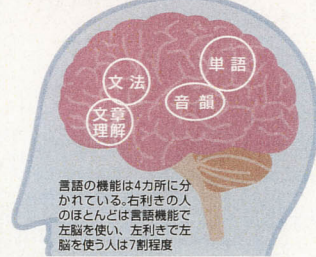
「バイリンガル脳」になれる人

専門家の意見をもとに編集部で作成。3項目以上にあてはまれば、今からでもあなたは「英語」で考えることができるようになるでしょう

- 子どもの頃から(日本語の)本をよく読んでいた
- 子どもの時、国語の成績がよかった
- 人と会話をするのが好きだ
- まじめにこつこつ努力することが苦痛ではない
- 短くても留学経験がある
- 言語習得の目的がはっきりしている
- 別の外国語をすでに習得している
- 言語による発音や文法の違いを意識することができる

言語に必要な脳の場所

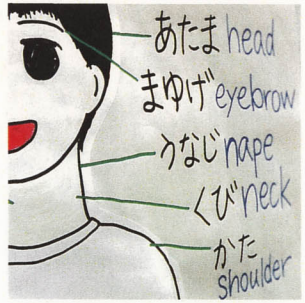
酒井邦嘉東大助教による



言語の機能は4カ所に分かれている。右利きの人のほとんどは言語機能が左脳を使い、左利きで左脳を使う人は7割程度

近づくということのようだ。酒井さんの研究では、「文法中枢」だけでなく、「同じ前頭葉に位置する「文章理解」についても、これまでの実験で同じ傾向が見られるという。ということとは大人になつてからでも、バイリンガルになれることだろうか。

もちろん、これまでに語学の早期教育が強調されてきたにも訳がある。たとえば、日本人が苦手なRとLの発音。脳が日本語に最適化されていくうちに、必要な音の区別と判断されてしまったと考えられている。脳の柔らかい時期というのは、おおむね思春期までとされる。脳の四つの部分のうち「音韻」はこれが当てはまるらしい。だが、酒井さんの仮



大切なのは国語力

「言語に関する脳の四つの部分のうち「文章理解」と「単語」については大人でも鍛えればどんどん伸びる。また、「文章理解」というのは日本語と同じ部分を使っている、という。国語力が伸びれば英

説を見ていくと、大人の語学学習に希望が見える部分が出てくる。

語の文章理解も深まるはずということだ。

苦手な部分を鍛え、脳の連携をよくすると言語能力も上がると見られているわけだ。要は、20代でも30代でも、それ以降でも、トレーニングすればだれでも「バイリンガル脳」、つまり、「母国語以外の言語で考えることができるようになる」というわけだ。

実際、冒頭の中国人の林さんでも、「日本語は大学で勉強しただけ」とは言うものの、中身をよくよく聞いてみるとかなりのトレーニングを積んでいる。朝は6時に起きて、授業までの間、キャンパスの片隅で教科書を暗唱するのは当たり前。

「授業中はもちろん、休み時間も中国語は禁止。寮でも「中国語禁止」の張り紙を張って、無理して中国人のルームメイトと日本語で会話していました。変な日本語だったと思いますけど。そして、大学の先生からは日本語で考えるように言われました」

